



発行日 *** 2009年11月1日 e-mail: akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

皆様からの投稿をお待ちしております

<http://www.justmystage.com/home/akutagawa/>

一部50円です

ペットとお経



朝の散歩の時に、犬を連れた人が犬の糞を始末している様子を見て私はいつも呆れて見ていた。私はこれまでペットというものに興味を感じたことはなかった。小学生の頃に兄が飼っていた鳥の餌獲りをさせられた思い出がある。十姉妹から鷹やカラスまで随分いろいろな鳥を飼った。その中で鷹の餌には困った。生きた蛙やドジョウでないと食べないので田圃を探しまわって苦勞したものだ。それ以後、生きものを趣味として飼うということを考えもしなかった。

娘がある時、鳥を飼いたいと言い出した。おかめインコという小鳥だという。初め反対していた家内も写真を見るうちに段々とインコの可愛らしさにのめり込んでいく。家内は私に相談する事もなく、産まれたての雛を予約したと言う。そこまで話が進んでいるのなら反対のしようがないので黙っていた。家内は、鳥かごの手配から飼育の研究などを熱心に行っていた。生後四ヶ月の雛を買って来て育てるうちに余りにも可愛いからと、二週間後にはさらにもう一匹予約した。

最初は見ていただけだったが、家内の熱心さにほだされて私もインコを手に乗せて話しかけるようになった。毎日話しかける家内の言葉にインコは反応しているように見える。すると家内は更に嬉しそうに話しかける。そばで見ているとおかしいのだが本人はいたって真剣である。

知り合いの尼さんから聞いたお経の話を思い出した。「毎日誂経するのは辛くはないですか？」という私の間に尼僧は「とんでもない。毎日、お経を称えながらお釈迦様と問答しているから楽しい。そうでなければ続けられない」なるほどそう言うものかと妙に得心した記憶がある。

家内にとってもインコは尼僧のお経のように毎日変わる自分の心を映す鏡のような役割をしているのかもしれない。インコの何気ない仕草から自分の心の移り変わりを感じる共感の世界を演出して楽しんでいるのだ。家内にそう言って聞いてみた。「そうねえ。純心に慕ってくれるから」なるほど…。純心な相手ゆえに、きれいな鏡のように自分が映り何かに気づき何かを悟るのかもしれない。今日も朝から、家内はインコに「おはよう。よく寝れた？寒くなかった？」と話しかけています。



連載 爺捨て山12

梵店主

「どうして男の人はあなんでしょう」と聞く奥さんに私は「男は見栄っ張りでプライドがあるから」と答えながら、孤立していくだろう自分の姿をダブって見ていた。

七年前に田舎の山奥に引っ越した八十歳の奥さんが語る言葉は重い。定年退官された主人と田舎生活を楽しんでられるのかと思ったが心中は複雑なようである。

奥さんは、社交的な性格が人との交わりがなくなつてから心が沈むようになって。三年が過ぎた時、「これではいけない。人の輪に参加しなければ」と決心して茶の稽古に通い始めた。

一方ご主人は、昔のゴルフ仲間と時々会うだけで地域の人と親しくなる事は無い。歳をとるに従いますます頑固になり孤独になつていく。

何がそうさせるのか。家族の為に己の人生を犠牲にして仕事をしてきたが、家族は自分が思う程に評価してくれなかったやせなさか。自分の未来に希望をもっていた頃を忘れられないからか。

この孤独を癒してくれるのは、今までの自分と決別した自分になる爺捨て山での時間の中で、何かに気づく時なのではないかと思う。

ヒマラヤへの道1

梵店主

ほんとうに何も勉強せずに卒業してしまつたよっちゃんは、山岳部の主将というキャッチフレーズだけで就職試験を通りN証券会社に就職した。

四月の初め東京の本社に集められた新入社員は二百人余り、北海道から鹿児島まで全国から採用されていた。数日の研修を受け、よっちゃんは、東京出身の渡辺君と二人が四日市支店勤務になつた事を知らされた。よっちゃん

は、勤務地に京都から近く山がある所を希望として言っていたから、四日市は鈴鹿の山も近く嬉しかった。

支店に赴任すると、支店長が「しもちゃん」と呼びかけてきて驚いた。暫くしてから「空に伸びたザイル」という山の本を男子社員に買い与え、読ませて感想文を書かせた事もあつた。いろいろとよっちゃんに気を遣つてくれた。

証券会社の営業は凄いい。四日市支店は百余りあつた支店の中でも営業成績がトップであつた。そんなやり手の支店長の部下になつたのである。後年この支店長は役員になり会長にもなつたと聞いた。

よっちゃんが四日市に来て間もなく山岳部の先輩の石川さんが名古屋に転職して来た。五月の穂高・明神岳を登り温泉で泊まつたことがある先輩だ。

よっちゃんは毎週の如く土曜日の夕方には近鉄特急で名古屋の石川さんを訪ねた。先輩の四畳間の天井にはカラコルムの高峰K2の地図が大きく張られていた。部屋隅にはチキンラーメンの箱が置かれアメリカン・ヒマラヤンジャーナルやヒマラヤンジャーナルなど山関係の本が積まれていた。

先輩の言葉はいつも「しもやん、K2の未踏である西稜を登ろう。まだ誰も登つてない」。私は、一度もヒマラヤに行つた事もないが、先輩は一年もの間滞在していたからよく知つていた。

私も行きたくてしようがなかつた。夏の終わりごろ、先輩が「この冬から偵察をかねてカラコルムへ行く」と言い出した。「どこを登るんですか？ ぼくも行きたくないなあ」とよっちゃんは言つた。

先輩はJAC名古屋支部のラトックI峰という未踏の山を登る遠征隊に参加した。遠征隊には多くの費用がかかる。当時の為替レートは三百六十五円であり、航空運賃も高く登山用具や現地での費用など数千万円が相場であつた。この費用を調達する事が、まず越さねばならないハードルであつた。

先輩の参加した隊には有名な医者であるIさんが隊長であつたので名古屋のマスコミや経済界から寄付金を募つたのだが、参加する隊員にも数十万の負担金が課せられる。この金を用意するのも大変だ。友人や親戚に借りたりするものや、都合がつかず参加を取り止める者もいる。

山岳部の古老はいつも、「遠征隊の寄付金を貰う為に会社廻りをして靴三足を履きつぶした。」と言つていた。それほど金集めは大変である。

大変なのは金だけではない。勤めていた会社を辞めて行かなければならぬから、無事帰つてきても就職先が中々ない。金を借金してヒマラヤに行き帰国しても仕事がないという大変な目に会うことを覚悟しなければならなかつた。定年まで勤め上げようとするれば絶対にヒマラヤには行つてはいけない。

そんな訳で山岳部の先輩の中でもヒマラヤ登山経験者はかなり変わり者であつたといえる。ところが、よっちゃんが行きたくても、よっちゃんのいた山岳部は部員が少なく遠征隊も6年前に出した切りで出せるような状況にはなかつた。だから石川先輩は部外の遠征隊に参加したのである。出来れば、気心の知れた者同士の遠征隊で山登りをする方が楽し

いに決まっている。その仲間がよっちゃん達の部内にはいなかった。よっちゃんも石川先輩が二人して燃え上がつていたのである。しかし、この小さな二人の火が大きな火になっていくのである。

よっちゃんの仕事の方は、全く熱が入らなかつた。営業成績のノルマが厳しく途方に暮れる日々を過ぎなければならなかつた。当時、営業が厳しい会社としてトヨタ自販、積水ハウスとよっちゃんの会社が遅くまで働くので有名だつた。よっちゃんは国家試験の外務員資格の試験もろくに勉強せずに通じ「夜討ち朝駆けの営業」で新規顧客作りと日々の株式売買による手数料稼ぎに追われていた。

そんな或る日、カラコルムに行つた石川先輩から葉書が来た。カラコルム・フンザにそびえる高峰ラカポシの未踏の北稜を登ろうと書いてあつた。

そんな或る日、カラコルムに行つた石川先輩から葉書が来た。カラコルム・フンザにそびえる高峰ラカポシの未踏の北稜を登ろうと書いてあつた。



カラコルムの雄峰ラカポシ (7788m)
左手に伸びる尾根が北稜

上原むつえ

世田谷の家を売り、松陰神社の隣の家で服の修繕屋を開業した。この時に手伝ってくれたのは小菅さん夫婦である。

小菅さんとの縁は、私が世田谷駅前であつた占いに「あなたは信州生まれの人に会える。この人があなたを助けてくれる」と言われた時から始まつたのかも知れない。

小菅さんは私が土地をかうために不動産屋に入りにいっている間に、どういふ訳かいつも隣にいて話を聞いていた。売買の話が決まつた時に小菅さんは「あなたは何の商売を始めるんですか？」と私に聞いてきた。「服の修理屋をしようと考えています」と答えた。すると小菅さんは「おもしろそうですね。私も手伝わせてください。」と言う。

話を聞けば信州生まれ五十二歳で奥さんもある。世田谷での占いの言葉をお願い出し「きつとこの人が私を助けてくれる人なんだ」と思い手伝ってもらふ事にした。

当時は戦地から引き上げてきた兵隊さんなどが多く、「縫製者を募集！」というチラシを張ると応募者が殺到した。その中から縫製経験がある技術者を雇

つた。店の番頭さんを小菅さんをお願いして、私は仕事をしながら池上さんに通うことにした。

店は開店すると行列が出来るほど繁盛して従業員を増やさなければならなくなり、三十人ほどの人数になった。国産のフラスナーは安いですが故障するので、英国製を横浜で仕入れした。値段は一つ七十銭もしたが、取替え修理代で百八十円もあつた。ある時から横浜港に寄港していた英国船が運んできた積荷の洋服生地が入手できるようになり、背広の仕立もするようになった。

私は、三十人の食事の世話もしていたので如何に安く美味しい食事を作るかに苦心していた。毎日食材を手に入れるために築地の魚市場に出かけた。そこでマグロの尾っぽが切り落とされていたのを見て、刺身で食べることを思いつき市場の人に頼みもらつて帰つた。この刺身は大変美味しく長く好評であつた。

店は、高級な服を縫製できるようになり百貨店などにも取引が拡がり順調であつた。私も仕事をしながら日蓮宗の勉強を続けて身延山大学を卒業し、経営者としても尼僧としても少しばかり余裕が出てきたときであつた。身延山大学で共に学んだ友人から手紙もらつた。友人である彼女は、「一度、遊

びに南国の高知へ来てください。」という文面であつた。それで私は久しぶりに友に会うのもいいだろうとお思ひでかけた。この旅行が私の人生を大きく変えたのである。

友人は、高知の南国村にある日蓮宗の寺で住職をしていた。彼女は私と同じ歳で三十八歳であつた。幼い時から病弱で結婚できないだろうという事で尼僧になつた。近在の生まれで寺に来た。長年住職を務めた和尚が急に亡くなり、村人の勧めで尼僧になつたわけである。

寺は荒れ廃寺の如き有様で修繕が必要であつたが、何分田舎で檀家も少なく費用の工面がつかず放置されたままであつた。

私が訪ねた時、住職になつていた友人は寂れた寺で独り暮らしていた。久しぶりの旧交を温め寺を後にして東京に帰ろうと寺の表に出て細い道を歩き水路の脇に来た時に異様な光景を見た。三、四人の老婆が道を塞ぐように正座している。私が歩いてその傍に行くとも老婆の一人が私の着ている衣服をつかみ「待ってください。どうか助けてください」と急に請願したのであつた。私は、急なことに訳が分からず驚いた。

早く東京へ帰り仕事をしなければいけない想いが強く最初は老婆達のいう事が理解できなかったが、聞くうちに不思議な縁ともいえる運命話を聞かされる。

る。

四国は八十八箇所巡りで有名なように空海さんの信者が多く、日蓮上人の信者は少ない。高知県での日蓮宗の寺は十四ヶ寺だけであつた。そんな中であつて、この寺も荒れるに任せた状態が続いていたのであつた。この現状を憂う老婆達にお告げのような話をした漂白の修験者がいたのである。

その修験者は、寺に泊まり出て行く時に、その場にいた老婆達に「ちかいうちに東京から人が来る。その人が助けてくれる。決して逃してはいかんぞ」と言つて去つた。

私を見て、私こそがその人だと老婆は言うのだ。そんな話を簡単に私は信じる訳にはいかなかったが、しがみついて放さない老婆たちの気迫と執念にとうとう根負けした私は、わかりました。寺を修繕するのは大変費用のかかることであるから、暫く考えさせて欲しい」といつて何とかその場から解放された。

三十八歳の尼僧である私の中で、日蓮宗という寺だけの縁で助けてくれたという信者の声が大きくなり無視できなくなつて真剣に悩み始めた。迷つたあげく、千葉におられた日蓮宗随一と言われた祈禱師である後藤さんを訪ねようと思ひ立つた。

異国に仏教遺跡を訪ねて

忙しい生活の中から、旅行の機会をつくるのはなかなかむずかしいものです。よほど気をつけていないと、チャンスを見逃してしまいます。私は比較的チャンスに恵まれ、いろいろな国を訪れることができました。とりわけ、インドや東南アジアの仏教遺跡を巡ることができたのはこのうえない幸運だったと嬉しく思っています。

主人が存命の時は、旅行に行きたいと思っただけでも、お互いに用事に追われ余裕がなく行けません。あるとき、「近くでもいいから、あなたが出張するときにでも一緒に連れて行ってほしいわね。四国の霊場巡りでもしたの出張があるから一緒に来たら…」とさっそく誘ってくれたのです。私は「ああ、うれしい」と満面の笑みで応えました。主人を二人ではじめての四国旅行です。

四国では、主人は仕事をしている間、私をあらかじめ見物させてやろうと気遣って、霊場巡りの計画を立ててくれました。「気をつけて、迷子にならないように行ってらっしゃい」とおくられ、私は出かけたのですが、このときは主

人の、「過ぎたるは」と思えるほどの心配りにお互い気疲れしてしまいました。ですから、四国霊場の印象深い思い出はあまり残っていないのです。

人はどれほど元気でいても、いつ「さよなら」をしなければならぬ別れのときがおとずれるかわかりません。主人を亡くしたときは、ほんとうに世の無常を感じました。ですが、いつまでもよくよ沈んでいるばかりではいけません。悲しむだけ悲しんで、私は自分の生を積極的に生きることにしました。私事に、趣味の習い事や旅行に、私の時間をおしみなく傾注しました。

世界仏教会大会という催事がタイ国で開催されたときのことです。新婚早々の本願寺の新興様とお裏様が参加されることになり、代表団がつくられました。その代表団に「私も加えてほしいなあ」と思っていたのです。参加の希望を申し出たところ、認めて頂きました。大会後にジャワ島にあるポロブドゥール遺跡を見学する計画が含まれていたのが、たいへん楽しみだったのです。

閉会后、代表団一行は会館前で記念写真を撮り解散し、自由行動に移りました。私達のグループはジャワ島へ飛び、世界最大といわれるポロブドゥール遺跡の見学をしました。こんな大きな遺跡が深い森の奥にあ

って、長い年月埋もれるようにねむっていたことに驚きました。いまは全貌が明らかになり、その荘厳さに圧倒されます。

お釈迦様の一生が造形されているのを拝見して、まことに勿体ない事だと感無量になりました。たいへん偉大で立派な建造物をただただ見とれていました。驚嘆と感激の思いで、遺跡を建造した人々への尊敬と感謝の気持ちがあふれます。よくも遺跡を壊さずに残しておいてくれた事、こんな大きな遺跡がジャングルの中に隠されてよく保存されてあった事、現在は世界遺産の一つとして保存してある事など、何んと有難い事だろうかと思いました。

大きな建造物の上に、たくさんの仏様、お釈迦様が見事に表現されています。私は感激して両手を合わせて「すばらしい。こんな巨大遺跡によくぞまあ、お目にかかせて頂けた」と感謝しました。それから、数年の後、私の生活環境も変わり多忙を極めました。主人の急逝や子供達の結婚など、一息する間もないような生活を送りました。次から次と用事に追われ、旅行好きの私がどこへも行けず、いたずらに年令を重ねてしまいました。やがて環境も落ち着いてきて、自分

で旅行の計画を立て行けるようになったのです。

まず、まだ実現していないアンコールワット参詣の計画を立てました。心易いお友達を誘って、訪れることにしました。その後、私が旅行を計画すると少なくとも七、八人は参加してくれます。

まず、カンボジア首都のプノンペンに飛びます。市内観光やショッピングを楽しんでから、夕刻にアンコールワット遺跡群のある都シエムアップに入りました。

城壁前の大きな池には蓮の葉が一面に浮いています。何んともいえない心が温まる風情です。まん丸のお月様の淡い明かりがお城を浮かべがらせます。月影に浮かぶアンコールワットの夜景を存分に満喫しました。

翌朝は早くから、城内の観光です。外観、内観を見て回りました。あまりに熱心に見回っていたために友達とはぐれてしまい独りに取りのこされてしまいうハブニングもありました。広い城の中で心細い思いをしながらも、五百年前の古い石造りの城内で時空を超えた迷い子になったような、何んともいえない不思議な感覚にとらわれました。いくら見て歩いても、見飽きたりません。疲れを忘れて歩き回りました。

城外にあるアンコールトム
の遺跡には多くの石仏があり
ます。感銘の一語につきます。
私の部屋には、アンコールトム
の肖像画を軸に入れて飾って
あり、懐かしい思い出になっ
ております。



もうひとつ見ておきたかっ
た仏像がありました。ピルマの
寝釈迦です。三日間程の短い日程でし
たが、気の合った友人達と行く事が出
来ました。眼を閉じ大きな身体を横た
えた平穏な寝釈迦さまの姿を拝見し
て、何んとも言えない穏やかで有難い
気持ちになりました。

東南アジアには、日本の仏様とはず
いぶん趣の異なる仏様があるものだ
と、教えられました。

七十歳の中ごろ阪神大震災が起り、
自坊の屋根や床が傷み大修理を行いま
した。この時の過労で心筋梗塞・心不
全を患いましたが、三週間の治療を経
てリハビリに専念したお陰で、歩行不
全にも言語障害にもならず健康を回
復いたしました。

アメリカ、カナダへの旅行の誘いを
受けて一緒に結させて頂き、北米大陸一
周旅行をすることもできました。

次回は、そのアメリカ旅行を報告し
て、三年間にわたる「芥川だより」の
連載を終らせていただきます。

◆梵日記のブログから◆

日本のゆくえ

東アジア諸国とアメリカとバランス
よく付き合いたいのが、簡単にはいきそ
うにない。世界の覇権国・アメリカへ
の根回しをしないと何も進まない厳し
い現実があるようだ。

外交は国益を守る戦いであるから仲良
しクラブとはちがう。長い時間をかけ
た駆け引きもあれば、一瞬で流れが変
わる危険性もあるにちがいない。外交
経験の無い鳩山さんが友愛精神を前面
に押し出しても、世界の老練な外交家
たちは笑っているかもしれない。しか
し、駆け引きばかりが良い成果をもた
らすとは限らない。過去の歴史に学び
専門家の意見を聞くのもいいが最後は
独断で決める以外に道は無い。官僚か
ら政治家が政治的な決定権を取り返
し、政治家の責任で判断して国を動か
していく先に見える日本の姿はどんな
ものだろう。

今は、アメリカの影響が強く全てが
アメリカの言われるままであったが本
来は日本はアジアの国でありアジアの
民である。近い韓国や中国と共同体を
模索して作り上げていくのは当たり前
のことではないか。日本の金と技術を
アジアの国々に援助していくのがよ
い。そのように考えれば、北朝鮮の核
ミサイルの脅威をことさら誇張せず共

同体への参加を呼び掛ける中で経済的
な貧困を援助し飢餓的な状況を改善す
べきである。

このような流れで沖縄米軍基地を考
えれば、縮小または廃止を率直に国会
で議論すべきだ。軍備に使う費用を貧
しい国への援助へ切り替える政策を真
剣に考えるべきである。核兵器をいく
ら持っても使えないのだから持たない
ほうがいい。

覚悟がいる米軍基地問題

昨日のニュースでは、沖縄の米軍基地
問題での米国の高官から苛立ちを伝え
るようなコメントが流れていた。日米
安保の基本にある米軍基地の根本が
今、我々の大きな宿題として残ってい
た事を知った。憲法9条を国是とする
我々は、この国の国防を改めて考えな
ければならなくなった。

限りなく軍備拡大に走る周辺国がある
国際状況の中で、非核三原則を貫き、
軍事大国にならず外交と経済交流で平
和な国際関係を維持するのは大変だ。
軍備に使う金を貧しい周辺国に経済援
助し、まず経済的に格差の少ない東ア
ジア地域になるような政治的な政策が
いる。その政策を支えるのは、国民の
政府への支持である。色々な危険性を
報道されても毅然と立ち向かう覚悟が
日本の国民に求められる。鳩山さん、
頼みますよ。ブレたらあきませんよ

携帯エッセイ 16

「足るを知る」

介護の日常は忙しい。寝食に追われ
る。それだけで瞬く間に時間が過ぎて
行く。

そんな中でも時間を割いて外にコー
ヒーを飲みに行った。ささやかな娯楽
だ。

店はホテルのラウンジを利用した。
喫茶店やコーヒーショップは狭いため
に車椅子の客を嫌がるからだ。店員の
態度で分かる。

ホテルは少し割高だが、介護者にも
応対は丁寧だ。惨めな気持ちにならず
に済む。ゆったりとした雰囲気の中で、
リッチな気分になれた。

母も嬉しそうだった。

「こないなハイカラな所でお茶を飲む
のは初めてですわ」

そう言われると細やかな親孝行をし
た気分になった。

介護者は体が不自由だから、多くを
望まない。些細なことに喜びを感じる。
側に居ると介護している側も同じ心理
になる。俗世のしがらみを忘れ、心が
穏やかになった。そして自戒した。

「人生、四苦八苦することはない。足
る心を持ってば、幸せは身近なところ
にある」
と。(龍)

「貧困率という現実」

明石幸次郎

時の総理大臣が「私も中流だなあ」と言った日本は、かつて一億総中流社会と言われたものです。この時代は真面目に働きさえすれば、家族も養え、家も持て、子供も勉強が出来れば、親も無理をして大学までやれると言う、ウチも隣も暮らし向きは同じや、と言う階層が多かったのではないのでしょうか。日本は、欧米の様な富の格差が大きい階級社会と違い、一億総中流、格差なき社会であると政府自民党も誇っていましたし、われわれ国民も何となくそう思っていました。もうこれは、今の日本社会では過去の幻想に過ぎないようです。

先日の新聞に余り聞き慣れない「貧困率」と言う言葉が載っていました。この記事によると、OECDの2000年の統計では、日本の相対的貧困率（年収が国民の年収の中央値の半分に満たない国民の割合）は、13、5%で、米国の13、7%に次いで2番目に貧富の格差が大きかったようで（OECD加盟国の平均は8、4%）2003年の統計では、この数字が14、9%となり、政府発表では、2006年は15、7%と貧困率が高まっています。

る。因みにこの貧困率の低い、いわば所得が相対的に平均している国は、デンマーク及び北欧諸国です。

現在、働く人の所得は9年連続して減り続けており、民間企業に勤めている人の約40%が税込み年収で300万円を下回っている。フルタイムで働く男性のみに限っても21、6%が年収300万円以下である。又、民間企業勤労者4485万人のうち、実に1023万人（22、8%）年収200万円以下という数字が出ています。2008年の国民生活基礎調査で年収200万円未満の世帯の割合が18、5%となつて、年収200万円以下という事は、月の手取りにすると15万円にも満たません。これでは、最低限、生活することだけが精一杯で、子供もまともに育てられないし、働いていても、貯金どころか、自分の小遣いすら確保出来ません。こんな生活レベルでは、幾ら横並び意識が強い日本人でも、自分たちは中流であるなんて、口が裂けても言えませんね。

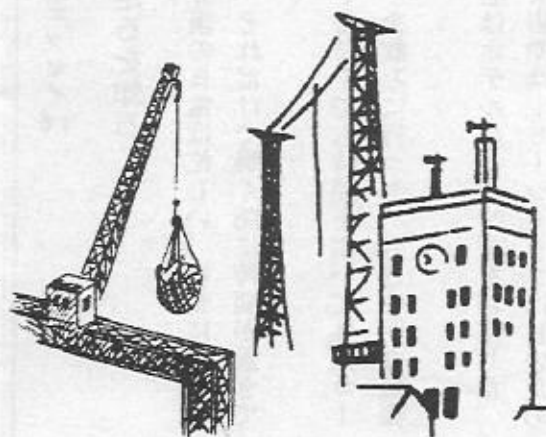
この相対的貧困率は1980年半ばから上昇しているようで、これは、「高齢化」や「単身世帯の増加」、90年代からは「勤労者層の格差の拡大」が影響を与えていると分析されています。働く人の所得格差は、特に最近大きな社会問題になっている、正規社員と非

正規社員との格差が原因で、非正規社員は景気が悪くなるとまず、残業をカットされ、月収での残業代、休日出勤手当などの割合が大きいために、正規社員に比べて大幅に月収が減ります。更に悪くなると雇止めという名の解雇が待っており、所得は失業手当という家賃か飲み代程度のお手当てがあるものの、次の仕事が見つかるまで収入ゼロとなります。それに比べ、正規社員は、余程のことがない限り、解雇までには至りませんが、同じ正規社員でも、大企業と中小企業の所得格差は、大幅に差があることも事実です。

この様に、現在の日本社会は働くものの中での格差が広がり、それが、政府の社会保障給付（児童手当、失業給付、生活保護などの現金給付）及び税による所得格差の縮小策が他のOECD諸国と比べて極めて貧困だと言う事で、税、社会保障給付を含めない市場所得のみによる貧困率と、税、社会保障を含めた可処分所得の貧困率の二つを比較した分析では、日本は市場所得の貧困率ではフランス、ドイツ、ベルギー、デンマーク、イギリス、アメリカなどの欧米諸国よりも低いですが、可処分所得における貧困率では、日本はアメリカを除く他の諸国の貧困率を大きく上回る結果となっています。これは、ヨーロッパ諸国は、税および社会保障給付

によって低所得者の可処分所得を引き上げ、この政策によって、貧困率を引き下げています。それに比べ、日本は再分配政策が極めて弱く、その結果として可処分所得の貧困率が高まっているとの分析です。

小泉構造改革を推し進めた竹中平蔵は、色々な分野で規制緩和を行って、外国人も含め能力のある勝ち組の人達が実力を出せる社会を作り、精一杯儲けてもらい、それで税金を増やし、落ちこぼれの負け組に対しては、政策的に再分配して格差を少なくすることが、グローバル市場経済で日本が唯一の生きる道であるような主張をしていました。その象徴が、それまで認めていなかった労働派遣を製造業へも認める規制緩和を行いました。彼はこのことに対して、働き方の多様性と自由を認め、同一職種、同一



賃金を目指していたので、この規制緩和自体は間違っていないかったと今も言い続けています。現実には、この政策の目的と結果とが大きく食い違っていて、結果は労働派遣会社と大企業の自動車メーカー、大手弱電メーカーなど大企業に多額の労務コストの削減による膨大な利益をもたらしただけで、しかも不況になると働き方の多様性どころか、派遣社員は雇用の機会を一変に失い、路頭に迷う若者を多数創出し、それが貧困率の上昇をもたらしてしまいました。この貧困率だけがアメリカ並みに上昇してしまい、これにより、社会的不安が増大し、若者に明日への希望を奪ってしまう格差社会になってしまったということは紛れも無い現実です。又、この貧困率の年齢階層別では、特に51〜65歳の壮年層と18〜25歳の若年層の貧困率が諸外国に比べ高いと言う事です。民主党政権になり、政策として児童手当などの社会保障により所得の再配分を行って、低所得者層の可処分所得を増やせば、社会的不安も緩和され、景気刺激にも繋がると言った方向で舵をとりつつあるのは、決して間違っていないと貧困率の新聞記事を読んで思いました。それにしても、永年の自民政権の政治的無策は若者に大きい荷物を背負せることになりました。

「かなしみ」

毎年秋の慣例となっている山仲間が集いが、先月上高地であった。二十七年前の冬、雪崩に巻き込まれて死亡した後輩を追悼するための集まりである。私たちの中に彼をよみがえらせ、近況を語り合いながら酒杯を酌み交わす。焚き火を囲んで、大いに笑い、大いに飲む。

あのとき彼はまだ一年生、十九であった。二メートル以上深い雪の底から掘りだされた。目をつむり、寝ているかのような。起こせば目を開けそうなほど穏やかな寝顔であった。

その死は、われわれに大きな悲しみ、苦悶、悔恨をもたらした。せめて彼にたいする心づくしとして、一年に一度は集まって彼を思い出し、われわれが生きているかぎりは忘れずに心に刻んでおこうと、上高地に集まるのである。

私たちとはまた違う、もっと深い悲哀を味わったのは家族であろう。とりわけ母親の沈痛な悲しみは深刻だった。三回忌に彼の自宅を訪れたとき、大きく引き延ばした彼の写真が襖にはられていた。そこになにか、息子の死を受けいれたいかという意思、息子を死に至らしめたものにたいする怒りのようなものを感じた。それから数年後、彼の母は亡くなっ

た。悲しんで、悲しんで、悲しみに押しつぶされるように亡くなったのではないかと、そのとき俺は思った。

西田幾多郎が「我が子の死」という短いエッセイをのこしている。六つになつたばかりの愛娘を亡くした親の深い沈痛を、切々と吐露している。「この悲は苦痛といえば誠に苦痛であるう、しかし親はこの苦痛を去ることを欲せぬのである」といい、「今まで愛らしく話したり、歌ったり、遊んでいたりしていた者が、忽ち消えて壺中の白骨になるといふのは、如何なる訳であるうか。もし人生はこれまでのものであるというならば、人生ほどつまらぬものはない、此処には深き意味がなくてはならぬ」と哲学者はいふ。

竹内整一は「かなしみ」のもつ意味について、西田のこの言葉のほかに本居宣長の言葉を取りあげる。悲しみに耐えがたいときとき、それを言葉に表現し、人に共感してもらふことで慰められてくると宣長は説いている。また、死はどうにもならない出来事なのだから、その「かなしみ」をひたすら「かなしめ」ばいい、そうすることによってこの世をこの世たらしめていく大きな働きに従うということが可能になり、根本的安心が得られてくるという。そういう「かなしみ」のもつていた意味や力を見直す必要があると竹内は強

調し、「かなしむな」ではなく、きちんと「かなしめ」という。

宣長のいうようにきちんと「かなしむ」ことによって、はたして根本的な安心を得られるのであろうか。大きな働きというのは、「おのずから」の働きとも、神仏の働きともいふ。僕は、ひたすら「かなしみ」、そのなかで物語をつむぎだすことが必要だと思ふのだが。

遭難死した後輩の母親は、ひたすら「かなし」んだであらう。そして神仏の働きとつながるような物語をつくり、安心を得られたらあろうか。そうであったと祈るばかりだ。(猿)

俳句

養女

- 一人居の猫の為とこたつ出し
- 奈良公園鹿にえさやりふと楽し
- 久々に腰をのばして天高く
- 畦水路澄みし水や秋深く
- おかえりと阿修羅再び奈良の秋



若い

「失礼ですけど、あなたいくつ？
満年令で」

と聞かれた問いに、

「何でもいいじゃない」

と返したものだから、

「あなた変ね」

といわれる。

若さは可能性に満ちていて、すばらしい。けれども年を取る事は、それほど悪い事ばかりではない。年を取る事への不安は、大きくなるばかりだが、つまりぬマイナス面ばかり心配していると、本当は幸せであるはずの長寿の喜びを見失ってしまった。

失った若さを追い求めるままに、

出来れば一年、また一年と、八十歳を過ぎて、人生経験を積み重ねながら、心豊かに老いていきたいもの。高齢化、長寿、若い、そして成熟。

体力的には若い人には勝てないが、経験に裏付けられた知恵こそ年寄りの強みだと思ふ。

知能は生涯を通じて成長し、鍛え磨かれるという。若い時のような元気のある閃きは不可能だが、社会や人間を考えるには、長い年月のなかで味わってきたさまざまな経験、培ってきた深い洞察がものをいう。

食卓の愛

私が子供の頃の学校での話。

カンカンと鐘をたたいて、「お昼ごはんだよ。お茶をとりよきて」という

用務員の小母さんの知らせが、口ずてで各教室をまわってきた。マイクなんて無い時代だもん。

それぞれ広げる弁当の見事なこと。お母さんがつくってくれたのか、自分で弁当箱につめたのか。梅干、かつおぶしを醤油味にしみこませて

そのままつっこんである簡単なものから、玉子やきなんが入っている上

流家庭のものまで、いろいろ。フタ

で中身をかくしたり、おかずを交換

したり。とっても楽しみの時間だった。そんな幼き日の思い出。

今はどうだろうか。孫娘が来て、

「ごはん食べてきたの？」

「うん。一口食べてきた」と言う。

「おばあちゃんは、まだ食べていないから、あとで一緒に食べるか」

「犬を散歩に連れ出して」と、腹へ

らし運動をわざと喋りつけてみた。

孫娘は快く引き受けて、一時間くら

い経った頃だろうか。

「ああ、お腹がすいた。小さいワン

公だけとよく歩くなあ」と

いいながら、帰ってきた。

手作りの味噌わい

丹波の里に猿が出てきて踊る。

アヨイヨイと唄にまで歌われた

山家の人間。

味噌作りは子供の頃から手伝っ

た。雪のある間、コタツで味噌用

の豆を選別。お盆にのせてコロコロ

とところがせながら上豆ばかり選

別するのが母と私の仕事。妹はあ

まりのくず豆で、お手玉を作って

喜んで遊んでいる。

口ずさむ歌は「♪旅順開城約な

りて」。歌詞をよく思い出して

みると軍歌だ。小さい頃そんな歌

ばかり。ときにはこんな歌も「♪

夕焼けこやけの赤とんぼ 負われ

て見たのはいつの日か」

現代の味噌作りは、大豆、こう

じ、塩など材料が全部セットで揃

って、作り方まで添えられている。

でも作ろうとする人は少ない。

市販されている味噌は各種いろいろ、

甘味噌ゆず入り：などなど。私も物好き

だから試食してみたが、子供の頃に馴染

んだ味でないのが悲しい。

母と作った味噌の味、今年もよい年で

あるわなあつとぶやいていた母の顔。

からし漬、奈良漬、もろみ漬、いろん

な味。見よう見まねで覚えた作り方なの

に、何もかもすっかり忘れて、昔の味を

思い出してさがす自分にあきれ、あの時

の希望に燃えた情熱は湧きそうにない。

でも、味噌だけはいまも作って食べて

いる。そんな姿を、母に見てほしい。

編集後記

今年も早いものであと二ヶ月となりました。ますます早く年を取っていく感じがする。何も見るような成果はなく不況でアップアップの年でしたが、とにかく元気でいられることが、なによりもアリガタイと思うようになりました。

芥川商店街催し

歳末大売り出し

ガラガラ抽選&
スピードくじ

11月27日(金)～

12月6日(日)

特等 旅行(ペア—組)

1等 20,000円

2等 10,000円

3等 1,000円

4等 500円

5等 50円

☆

着物から服を仕立てます

梵~ぼん~

☆☆☆